

南コーカサス地方のネアンデルタール人

—アゼルバイジャン第15次発掘調査(2024年)—

西秋 良宏 東京大学総合研究博物館教授
アザド・ゼイナロフ アゼルバイジャン考古学人類学研究所主席研究員
ヤコブ・ママドフ アゼルバイジャン考古学人類学研究所上級研究員
ワギフ・アサドフ アゼルバイジャン考古学人類学研究所上級研究員
ウルビヤ・サファロヴァ アゼルバイジャン考古学人類学研究所研究員
新井 才二 東京大学人文社会系研究科助教
久米 正吾 東京大学総合研究博物館学術専門職員
王 媛 東京大学総合研究博物館特任研究員
仲田 大人 青山学院大学文学部講師

Neanderthals in the Southern Caucasus: The 2024 Investigations at the Middle Palaeolithic Cave of Taglar, Azerbaijan

NISHIAKI, Yoshihiro Professor, The University of Tokyo
ZEYNALOV, Azad Leading Researcher, Institute of Archaeology and Anthropology, Azerbaijan
MAMMADOV, Yagub Senior Researcher, Institute of Archaeology and Anthropology, Azerbaijan
ASADOV, Vagif Senior Researcher, Institute of Archaeology and Anthropology, Azerbaijan
SAFAROVA, Ulviya Researcher, Institute of Archaeology and Anthropology, Azerbaijan
ARAI, Saiji Research Associate, The University of Tokyo
KUME, Shogo Project Academic Specialist, The University of Tokyo
WANG, Yuang Project Researcher, The University of Tokyo
NAKATA, Hiroto Lecturer, Aoyama-Gakuin University

1. はじめに

2024年、私たちのアゼルバイジャンでの考古学調査も第15シーズンをむかえた。コロナ禍による2年間の中断はあったものの、最初に現地に足を運んだ2008年から数えれば17年目になる。その大半は南コーカサスにおける新石器化の研究にあててきたが、2023年度のダムジリ洞窟調査をもって、そのテーマには一区切りをつけることとした。成果は中石器時代から新石器時代への移行、発展を位置づける大部のモノグラフ三冊としてまとめることもできた(Nishiaki and Guliyev 2020; Nishiaki et al. 2021, 2025)。

そこで、次に手がけることにしたのは先史時代における、もう一つの大きな転換、中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行の問題である。いわゆるネアンデルタールとホモ・サピエンスの交替劇である。この問題は我々ホモ・サピエンス自身のよってきたる道を調べる人類史の大型課題であるから、世界各地で国際的な関心事となっている。その重要な研究フィールドの一つが、ホモ・サピエンスが誕生したアフリカ、旧

人の代表たるネアンデルタール人が進化したヨーロッパが接する西アジア一帯である。筆者らは新石器時代研究をおこなう一方、長らく西アジアや中央アジアに関連する旧石器時代遺跡調査、石器群分析を遂行してきた。また、アゼルバイジャンでも機会を捉えて資料調査をおこなってきたが、今般、それに本格的に取り組むことにしたというわけである。

南コーカサスは西アジアの北縁にあたる。そこは、先史人類集団の接触、融合、交替の場であった西アジアの一角を占めながらも、ソビエト時代の研究孤立が一因となって最も研究が進んでこなかった地域にあたる。加えて、南コーカサスが興味深いのは、そこが東ヨーロッパに接していることである。黒海、カスピ海の間を東西に走る大コーカサス山脈は現代においてもヨーロッパとアジアの境界をなしている。しかし、先史時代においても南北移動が全く不可能なわけではなかった。東ヨーロッパの中期旧石器時代に広く展開した独特なネアンデルタール文化が直接、波及していた形跡が指摘されている。これは、西アジア旧石器考古学の中心地、レヴァント地方にはみられない特徴であ



図1 タグラル洞窟と関係遺跡の位置。

り、複雑な文化・人類の交錯を解き明かすに欠かせない地域と言える。

要は、後期旧石器時代に新人だけの世界がユーラシア一帯に広がった経緯を調べるうえで、その前段にあたる中期旧石器時代における南コーカサスの人類動態の解明は今後によくがゆだねられた魅力的な研究テーマなのである。

この課題にとりくむべく、2023年度にはダムジリ洞窟、ダシュサラフル洞窟、アズフ洞窟、タグラル洞窟という名だたるアゼルバイジャンのネアンデルタール遺跡の現地訪問、再調査をおこなった(図1; 西秋2024、西秋ほか2024)。その結果をふまえてタグラル洞窟を我々の本格調査地とすることにした。2024年度の野外調査期間は8月11日から8月30日までの約3週間である(Nishiaki et al. 2024a)。

2. タグラル洞窟について

タグラル洞窟は、アゼルバイジャン南部、ホジャヴェンド県に位置する。中核都市フィズリ市からは西方約20 kmである。この地域は長らくナゴルモ・カラバフとよばれるアルメニアとの領土係争地であったから1980年代末以降、考古学者は立ち入りが許されなかった。タグラル洞窟の約3 km 東方には同国唯一の原人化石を出土したアズフ洞窟が位置しており、旧石器、古人類学研究には格好の地であった。にもかかわらず、いずれも全く継続調査ができないのはいかなものかと残念に思っていたところ、2020年以降の急速な政情変化を受けて私どものタグラル洞窟調査も許可されるにいたった。

この洞窟は、1960年にM. フセイノフが発見し、1963年から1976年まで断続的に発掘調査をおこなっ

た。その後、A. ジャファロフが1977年から発掘を引き継ぎ、ソビエトの研究者とともに1986年まで現地調査を繰り返した。

かつての調査成果において注目すべき点は二つある。一つは、中期旧石器時代の堆積が厚いことである。第I層は厚さ数十センチに満たない完新世層であるが、その下には数メートルにおよぶ中期旧石器時代層が同定された。筆者(西秋)はダムジリ、ダシュサラフル、アズフなどの中期旧石器時代洞窟調査を経験したが、居住層の厚さは最大でもアズフ洞窟の1.5 mでしかなかった。どれも短期的な居住地だったのであろう。数メートルに及ぶ中期旧石器時代堆積は南コーカサス地方全域を見渡してもタグラル洞窟が初見である。この間のネアンデルタール文化進化を探る遺跡となりうる。もう一つの注目点は、旧石器時代層の最上層、第2層の位置づけがゆれていることである。当初の報告(Jafarov 1983)では中期旧石器時代とされたが、後の論考では後期旧石器時代とされた(Jafarov 2017)。すなわち、タグラル洞窟ムステリアン文化堆積の最上層が後期旧石器的様相を示すというのであり、その妥当性は交替劇の観点から大いに検討する必要がある。

3. 2024年のタグラル洞窟発掘

そのような問題意識をもって、タグラル洞窟の調査にのぞんだ。洞窟は大河アラクスの支流の一つ、クルチャイ川に面した段丘に開口している。複数のチェンバーからなるカルスト洞窟の東端に位置する(図2)。幅8 m、奥行き10 mほどの洞窟である。高さは岩盤からは最大6 m以上あるが、1960年代の発掘開始時には堆積物のため地表からは1 mほどだったと思われる。

私たちがまず、おこなったのは、ジャファロフが設



図2 タグラル洞窟の全景。南から見る。



図3 タグラル洞窟東壁に設けた2024年度トレンチ。奥が北。かつてのトレンチ壁が垂直にたっており、かつ大きく東に湾曲していることがわかる。

定したグリッドの復元である。基準点は失われているので、当時と同じ形状を残していると思われる岸壁や巨石に測点を設置し1m角のグリッドを復元した。

ジャファロフ(Jafarov 1983)の記載によれば、洞窟内堆積の約2/3が発掘済みとのことである。現在でも洞窟の中央部は大きくくぼんでおりかつての大発掘を偲ばせる。しかしながら、2023年の予備調査により、少なくとも東壁沿いには未発掘の堆積物が残っていることがわかってきた。そこで、今回の調査においては旧トレンチ東壁の清掃を実施し、原位置を保つ堆積物の範囲を同定することにした(図3)。そこで、壁際に幅1メートル、長さ8メートルの南北トレンチを設け、既に発掘された区域と未発掘の区域の境界を定める作業をおこなった。

その結果、わかったのは下記の諸点である。

(1)かつての中央部の発掘は岩盤までおよんでいたこと。土層断面図が公開されていたのはごく一部であったから、今回、8m分の南北土層を正確に定めることができた。



図4 タグラル洞窟出土ムステリアン石器。上段：第3層、下段：第4b層。

(2)旧発掘区の東壁が大きく傾斜していること。つまり、1980年代以降、遺跡が保護されていなかったため、東壁上部のかなりの部分が崩落し洞内に土砂がたまっていると考えられた。

(3)過去の発掘では、出版されたようなグリッドに沿った発掘がなされていなかったこと。発掘がかなり進んだ段階でグリッドが後付けで設定されたい。

(4)東壁側の岩壁は大きくオーバーハングしており、未調査の堆積物が十分に残っていること。一部を今回、発掘したところネアンデルタール人が残した炉跡や石器(図4)、動物残滓が豊富に出土することが確認できた。

これらをふまえ、今後の調査では、従来公表されていなかった土層図を作成するとともに、旧石器時代各層から年代測定用の土壌サンプルを系統的に採取することができた。

石器資料も約1000点が出土したが、約3分の2は崩落土層出土であるから5m以上もある堆積をもとに中期ムステリアンの文化進化を理解するには、時期尚早である。ただし、石器群が、総じてザグロス地域のムステリアンと類似していることは確認できた(図4)。問題の第2層の位置づけについては、次年度以降の調査をもって論じたい。

4. おわりに

長く続けてきたアゼルバイジャンでの考古学的な農耕拡散研究(Nishiaki et al. 2024b)に一区切りつけて、本格的にネアンデルタール人研究を開始したのが今回

のシーズンである。

旧石器遺跡、特に洞窟遺跡は当然ながら山麓において密に分布する。アゼルバイジャンにおいては小コーカサス山麓が調査対象になるが、その大半が隣国との係争地であったのだから研究が停滞していたのもやむを得ない。したがって、今般の調査再開はアゼルバイジャン旧石器考古学に格段の進展をもたらすであろう。タグラル洞窟は筆者らが調査することにしたが、その近隣、ハイデルベルク人化石が出土したアズフ洞窟の再調査もアゼルバイジャン・ドイツの調査隊が開始したところである。いずれの遺跡についても、ソビエト時代の発掘資料については筆者らが分析をすすめている。アゼルバイジャン当局は、両洞窟ともユネスコの世界遺産に認定されることを目指している。その実現にも寄与すべく、今後の発掘をすすめていきたい。

2024年度の調査は、日本学術振興会科学研究費特別推進研究「サピエンス数理先史学」(課題番号24H00001、研究代表者：西秋良宏)、三菱財団人文科学研究助成「コーカサス地方における初期人類展開の考古学的研究」(課題番号202320018、研究代表者：西秋良宏)等によって実施した。

参考文献

- ・ Jafarov, A. 1983 *Mousterian Culture of Azerbaijan -based on Materials from Taglar Cave*. Baku, Azerbaijan National Academy of Sciences.
- ・ Jafarov, A. 2017 *Paleolithic Camps in Karabakh*. Baku, Azerbaijan National Academy of Sciences.
- ・ Nishiaki, Y., A. Zeynalov and Y. Mammadov 2024a Resumption of the Excavations of the Middle Paleolithic Taglar Cave, Karabakh. *Cultural Heritage of Karabakh and Zangezur in the Archaeological and Ethnographical Researches*, 11-12. Baku, Baku State University.
- ・ Nishiaki, Y., F. Guliyev and Y. Mammadov 2024b The Last Mesolithic Hunter-Gatherers at Damjili Cave, West Azerbaijan, the South Caucasus. *The First World Neolithic Congress*, 680. Sanliurufa, Ministry of Culture, Education, and Tourism Turkey.
- ・ Nishiaki, Y., A. Zeynalov, and Y. Mammadov 2025 *Damjili Cave — Investigating the Late Pleistocene to Holocene Human History in the Southern Caucasus*. Oxford, Oxbowbooks.
- ・ Nishiaki, Y. and F. Guliyev 2020 *Göytepe — The Neolithic Excavations in the Middle Kura Valley, Azerbaijan*. Oxford, Archaeopress.
- ・ Nishiaki, Y., F. Guliyev and S. Kadowaki 2021 *Hacı Elamxanlı Tepe — The Archaeological Investigations of an Early Neolithic Settlement in West Azerbaijan*. Berlin, ex oriente.
- ・ 西秋良宏 2024 「南コーカサス中期旧石器時代石器群の編年と系統についての新知見(Ⅱ)」『日本西アジア考古学会第29回総会・大会要旨集』 日本西アジア考古学会。
- ・ 西秋良宏・アザド・ゼイナロフ・ヤコブ・ママトフ・仲田大人 2024 「南コーカサス地方のネアンデルタール人—アゼルバイジャン第14次発掘調査(2023年)」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』9-12頁 日本西アジア考古学会。